



Title	日本語換喻表現の研究：名詞句単位の換喻を中心に
Author(s)	大田垣, 仁
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59393
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【28】

氏名	大田垣 仁
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 25336 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	日本語換喻表現の研究 — 名詞句単位の換喻を中心に —
論文審査委員	(主査) 教授 金水 敏 (副査) 教授 岡島 昭浩 准教授 井元 秀剛

論文内容の要旨

本論文は、日本語の換喻を対象とし、主としてメンタル・スペース理論からその理論的基盤について論じ、また通時的な語義変化と語彙項目の生成について実証的に論じたものである。

「導入」に続き、第 1 部「日本語換喻表現の共時的研究」には、第 1 章「日本語換喻表現の単位」、第 2 章「換喻研究史の概観と問題点の整理」、第 3 章「換喻と個体性」、第 4 章「換喻と述定」、第 5 章「換喻とカテゴリーの境界」が含まれる。続く第 2 部「日本語換喻表現の通時的研究」には、第 6 章「換喻と意味変化」、第 7 章「換喻と名付け」が含まれる。さらに、「結論」「既発表との対応」「参考文献」「辞書・事典」「用例出典」を最後に置く。A4 判 131 頁、400 字詰め換算で約 470 枚に相当する。

「はじめに」では本論文の研究対象、研究方法、構成等について概観する。第 1 部第 1 章では、換喻を名詞句単位と文単位に分け、そのうちから研究対象を名詞句単位の換喻に限定することを述べる。第 2 章では換喻の成立原理を扱った国内外の代表的研究について整理し、その問題点を指摘している。第 3 章では、これまでの研究でひとしづみに換喻として扱われてきた言語表現をメンタル・スペース理論から見た時、「語用論的コネクターが存在する純粹な意味での換喻」「値の側面のずれが語用論的コネクターの存在にみえる換喻

もどき」「換喻由来のカテゴリー化がなされているが共時的にはもはや換喻とはよべない名詞」の 3 つに区別できることを示す。第 4 章では、前章で示した「兼用表現」(語用論的コネクターのトリガーとターゲットの両方を一つの文で表す表現)が、日本語の換喻と換喻もどきを区別するテストフレームとしてもっとも適用範囲が広く強力であることを述べる。第 5 章では、第 3 章と第 4 章で扱った換喻と換喻もどきの区別を精緻化し、とくに先行研究で、作家で作品をあらわす「換喻」とみなされてきた例が、実際は換喻と換喻もどきの両方の特徴を持つことを述べる。

第 2 部第 6 章では、『日本国語大辞典第 2 版オンライン版』の検索を通じて、換喻が介在した名詞のカテゴリー化について分析する。第 7 章では、典型的な換喻の一部やエポニムが、カテゴリー化によってあらたなカテゴリーをうみだす現象であるのに対して、人名を用いた換喻もどきの類型(作家で作品をあらわすなど)は、そのような過程をもたないことを示す。

論文審査の結果の要旨

本論文の功績は、兼用表現というテストフレームを活用することによって、従来混同されることの多かった、いわば“真性”の換喻と、換喻もどきが厳密に区別できることを示した点にある。本論文で言う換喻とは、「語用論的コネクター」によってトリガーの役割(カテゴリー)とターゲットの役割が連結されている状態を言う。「(飲食店で)かつ丼(かつ丼を食べた客)がくいにげした。」がその例で、品物と注文者がコネクターで結ばれている。この場合、「*こうばしい臭いで出汁がきいたかつ丼がくいにげした。」のように、トリガーの属性とターゲットの属性を同じ名詞句に対して述語に使う(兼用表現)ことができない。一方、典型的な換喻とされることの多い「薬缶(=薬缶の中の水)が沸騰している。」のような例は、「赤い取っ手のついた薬缶が沸騰している。」のように兼用表現に何ら問題がない。このような例では、名詞句の値の側面のずれが語用論的コネクターのように見えていいだけの「換喻もどき」とされる。このような区別について、それを示唆する論はこれまでにもあったものの、ここまで明確に分析して見せた論はなく、この点で高く評価できる。またこの区別によって、「漱石が一番上の棚にある。」のような作家で作品をあらわす類の換喻の二重性も明らかにされた。

本論文はさらに、換喻の定義を厳密化・精緻化するだけでなく、歴史的な語義変化について換喻がどのように関わるかということを実証的に示した。その結果、真性の換喻は新しいカテゴリーを生じさせることがあるのに対し、換喻もどきはそのような作用がないことを示し、上記分類が単なる理論的な操作にとどまらず、具体的に日本語の変化を捉える際にも有効な概念であることを説得的に示したのである。

しかしながら、いくつかの問題点も指摘しておかなければならない。真性の換喻によつて示されるのが個体なのか、カテゴリーなのか、また何をもってカテゴリー化されたと言

えるのかといった、意味論的に重要な問題が十分検討されているとはいがたい。意味論の先行研究に対する理解の不十分さも散見される。また通時研究としている章は、実際には現代語における静的な分析に留まっていて、眞に言語変化の動態を捉えているとは言えないという批判も成り立つ。表現が冗長で同じ例文、同じ記述が幾度も繰り返される点も気になる。とはいって、これらの問題は、本論文の本質を損なうものではなく、今後の研究の進展によって十分乗り越えられるものと判断できる。

なお、2012年2月6日に本論文の公開の口頭試問を行い、最終試験を終えた。この点もふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。